

# 越中立山の地名私考(1)

—立山連峰域における「野」「原」「平」の付く地名緒論—

中葉博文\*

## はじめに

立山連峰域に関する資料をいくつか見ていると、「野」「原」「平」の付く地名が数多くみられる。しかも、中には「野」の付く地名が、別名で「原」「平」にも呼称され、また、「原」の付く地名が、別名で「平」の付く地名に、さらには、「平」の付く地名も、別名で「野」の付く地名にも呼称され、立山連峰域という「空間」では、「野」「原」「平」の地形語が付く地名は、どのような「地名の認識(認知)」がなされているのか。

本稿は、立山連峰域での「野」「原」「平」の地形語が付く「地名の認識(認知)」を検討する緒論として、必ずやらなければならない地名の分類に関する私考である。

今回は、「語構成」と「語義」の面から、立山連峰域での「野」「原」「平」の地形語が付く地名の分類について、今思う私見を述べてみたいと思う。

## 1 立山連峰域の「野」「原」「平」の付く地名の分類

今回、取り上げた立山連峰域の「野」「原」「平」の付く地名は、表1の通りである。表2は表1の「野」「原」「平」の付く地名を、それぞれの「野」・「原」・「平」の付く地名の語構成とその語義を中心に分類した表である。一応、表2内の表示法—1は、語構成による分類を示す。それぞれの地形語を語基(第二群)とし、「野」はA、「原」はB、「平」はCと表し、それぞれの語基に付く用語(第一群)を、十一の用語(ア～サ)に関する項目で分類した。同表内の表示法—2は、それぞれの地名の語基(第二群)である「野」「原」「平」の「語義」について、語意と思われるものを提示した分類である<sup>(1)</sup>。

表示法—1 (A・B・Cそれぞれの地形語に付く用語を●印で表示。)

ア. 動物・植物・樹木に関する用語	+ A・B・C
イ. 信仰及び伝説・説話に関する用語	+ A・B・C
ウ. 形容語に関する用語	+ A・B・C
エ. 地形・地勢に関する用語	+ A・B・C
オ. 人名に関する用語	+ A・B・C
カ. 比喩に関する用語	+ A・B・C
キ. 鉱物に関する用語	+ A・B・C
ク. 気象に関する用語	+ A・B・C
ケ. 地名に関する用語	+ A・B・C
コ. 交通・交易に関する用語	+ A・B・C
サ. その他の用語	+ A・B・C

\*富山県 [立山博物館]

表示法—2 (それぞれの地形語の語義を「野」は◆印、「原」は■印、「平」は▲印で表示。)

- A ア〜サに関する用語 (第一群)+①〜⑫の語義 (第二群)
- B ア〜サに関する用語 (第一群)+①〜⑧の語義 (第二群)
- C ア〜サに関する用語 (第一群)+①〜⑮の語義 (第二群)

#### ◆「野」の語義

①山に対する野原の意。②人里に対して荒野の意。③人家に対していう田畑の意。④緩傾斜地の意。⑤山の意。⑥放牧場の意。⑦草むらの意。⑧基地の意。⑨火葬場の意。⑩入会地の草刈地の意。⑪ヌの転訛で、「沼」あるいは「湿地」の意。⑫連体格の助詞「ノ」の意。

#### ■「原」の語義

①神聖な地の意。②場所の意。③山腹の意。④集落地の意。⑤開墾地の意。⑥ヒロ(広)、またヒラ(平)の意。⑦未墾の入会草刈地の意。⑧林の意。

#### ▲「平」の語義

①平地や平原の意。②山中にある平らな所の意。③長野県でいう盆地の意。④山頂または中腹の平らな場所の意。⑤山の中腹から麓のあたりの意。⑥崖の意。⑦傾斜地や斜面の意。⑧山の中腹や山腹の意。⑨坂の意。⑩岡の意。⑪縁やへりの意。⑫側や方の意。⑬自然堤防などの意。⑭山の一部が平らになっている所の意。⑮台地の意などである。

## 2 「野」・「原」両方の地形語にみられる同一地名

(▲印で示す。さらに、「原」が主のもの▲-1と表す。)

### ロ。「原」の付く地名が主のもの(現行地名)

「原」の語義については、上記にした語意などが考えられる。ただ、「原」の語は、あくまでも地形語と考える必要がある。『倭名類聚抄<sup>種本</sup>』の「原」の項目に、「毛詩云、高平曰原、音源、𪛗」と広く平らな所といている。『古事類苑』の「原」の項目では、「原ハ、ハラト云フ、廣平の義、地形ノ曠遠ナル處ヲ謂フナ、又常ニ野原ト連呼ス、宜シク野篇ヲ参照スベシ」<sup>(2)</sup>と、「野」とも関係するとも記している。

「野」について柳田国男は、「…野・原などいふ語を下に持った地名は、大体に皆開発の以前から有ったものと見てよからうが、其中でも実例が殊に多く、意味に著しい変遷があったらしいのは「野」という言葉であった。もとは、野(ノ)というのは山の裾野緩傾斜の地帯を意味する日本語であった」<sup>(3)</sup>と説き、以来、多くはこれに従ってきた。しかし、前記したように、「野」には、多くの語義が唱えられている。

また、「野」は『古事類苑』に、「野ハ、ノト云ヒ、古ハ、ヌトモ云ヘリ、又野原ト連呼ス、蓋シ我國ニテ野ト云ヒ、原ト云フ、其實兩者ニ確然タル區別アルニハアラズ、廣平ナル荒地ヲ、或ハ野ト云ヒ、或ハ原トモ云フノミ、尚ホ原篇ヲ參看スベシ」<sup>(4)</sup>と記すように、「原」とも関連する語である。この「野」と「原」が文献上、重複した地名としては、既に平安時代の資料にみえる。漢字資料では、「天皇遊樂原野」(『類聚国史』弘仁四

年)の記事があり、仮名資料でも「二条のきさきのまだ東宮のみやすん所と申しける時に、おほはらのにまうでたまひける日よめる」(『古今集』雑歌上・八七一詞)とみえる。

しかし、「野」と「原」は、本来は違うということで、その違いについての論考がいくつかある。

例えば、池田末則氏<sup>(6)</sup>や吉田茂樹氏<sup>(6)</sup>は、主として古代地名の用例や記紀歌謡、万葉集の用例から、前者は「野」は「そと」・「ほか」・「ひな」の意を持ち、「原」は「平」・「壘」の意を持つ広く平らな地とし、原一野一山という地勢的対立関係にあるとし、後者は「野」を「本来開発されていない原野で、開発すれば耕作可能な土地」をいい、「原」を①「特定の植物、ことに樹木の生える所」、②「野と類似の表現で、植生に関係なく広々とした平地」、③「野を開発して人手を加えた所。特に古代王朝(恐らくは飛鳥朝以後)によって清浄なる地として開かれた所」と分類している。いわば、地形・地勢的対立概念から「野」と「原」の相違を述べておられる。

辻田昌三氏<sup>(7)</sup>は、万葉集や祝詞などを資料に、「野」は生活上の親近感を示し、「原」は人間の住み難い環境と区別し、前者は概して任生活に近い場所であり、後者はその逆とするという。いわば、当時の生活空間からくる結果から、環境文化的対立概念から捉えられている。

また、糸井通浩氏<sup>(8)</sup>は、「野」は「山、里」と対立的に意識される空間概念の地形語であるが、「原」は地形語ではなく、地霊、草木の霊などの個々の「<sup>+</sup>霊」が「張る」状態を個的な形象で認識する語で、信仰的人文的分節語であったとされる。皇居や陵墓など特殊な土地も、特殊な霊のハル地として、「原」と認識されたとする。同一地点が視点によって、「野」にも含まれ、また「原」とも認識されもした。」という。

では、この項目で取り上げた地名はどうか。

#### ▲—1 弥陀ヶ原(みだかはら)

立山西腹に位置し、標高一六〇〇～二〇〇〇<sup>㍿</sup>までの広大な溶岩台地で、弘法平より上部、天狗山の西のすそのまでの一帯をいう。広義には美女平(980<sup>㍿</sup>)から室堂平(2450<sup>㍿</sup>)までの台地をいう。同地は湿原で多くの地塘(餓鬼の田という)がある。

同地は、弥陀ヶ原の「ヶ」が脱落して弥陀原、御田原(明治初期に仏教色を払拭するため改称された)、古名は中津原<sup>(9)</sup>また、天津原<sup>(10)</sup>とも呼ばれた。さらに、高原弥陀ヶ原<sup>(11)</sup>とも、多くの別称で呼ばれた。

同地の地名由来として、「その昔、親鸞上人が修行に立山に登られたとき、紫雲がたなびき、お香のにおいで天国に居合わせたような気持ちになり、遠くに阿弥陀様の姿を拝んだ。その後この原は阿弥陀様のおられる世界ということから弥陀の原といわれ、いつ

のころからか現在の名前になっている。」という<sup>(12)</sup>。弥陀ヶ原の「弥陀」とは仏教語の阿彌陀の略の意か。第一群に属する用語「弥陀」・「中津」・「天津」などは、信仰及び伝説・説話に関する用語と考えられる。第二群となる語基「原」は、①⑥の意などが考えられる。

また、同地を、「野」が付く「弥陀ヶ原野」<sup>(13)</sup>とも呼ばれた。「野」の語義は、①②④などの意が考えられる。

本来、「野」と「原」は地形語で、しかも、空間認識は、この世（集落）、両義的境界、あの世（異界）の三つに分けた中で考えられるが、ここで取り上げた「弥陀ヶ原」と「弥陀ヶ原野」は、先学がいう「野」と「原」の相違では論じられない。

むしろ、立山連峰域という空間に限った「野」と「原」の使い方と考える。

### 3 「原」・「平」両方の地形語にみられる同一地名

（■印で示す。さらに「原」が主のもの■-1とし、「平」が主のものを■-2と表す。）

「原」や「平」の語義については、上記にした語意などが考えられる。この項目では、原が付く地名は、高天原のみである。後は、何々平と「平」の付く地名で、別名で何々原と呼ばれるものがほとんどである。

では、この項目に属する地名の語構成と語義について述べてみたい。

#### イ. 「原」の付く地名が主のもの（現行地名）

##### ■-1 高天原（たかまがはら）

北アルプス水晶岳西麓に位置し、岩苔小谷に沿った標高二一〇〇～二一五〇m付近で、草原や地塘が広がる。高天原の「高天」の由来は、「太郎兵衛平の奥地で神々しさから命名されたのではないか。」<sup>(14)</sup>とある。高天は高い所、高地の意。また、高間で、ある程度の高さはあるが、狭間（はざま）のような狭い所の意とも考えられる<sup>(15)</sup>。第一群とする「高天」は、信仰及び伝説・説話に関する用語や地形・地勢に関する用語と考えられる。第二群の語基である「原」は、①②⑥の意などが考えられる。

また、同地は、別名岩苔平（いわごけだいら）と呼称される。同平は、「享和二年の絵図では、僅かに岩苔平が記入せられて居て、美しいこの平に漸く奥山廻り又は仙人足の足跡が伸びて来た事を物語って居る。」<sup>(16)</sup>と記され、また、「雲ノ平の北部に在る美しい平だ。大きな池があり、美しい草が広がる中に二ツ三ツの沮沔池もそれぞれ清冽な清水を湛えて居る。辺りは明るく四圍を鎖す樺の木影を撮して飽くまで清閑の境地である。」とも記している。岩苔は、字義通り「岩に生えた苔」の意で、動物・植物・樹木及び鉱物に関する用語と思われる。平の語義は、②④⑩などの意が考えられる。

## ロ、「平」の付く地名が主のもの（現行地名）

### ■一？大日平（だいにちだいら）

標高二五〇一㍿の大日岳南麓に位置し、称名川右岸の標高一六〇〇～一八〇〇㍿の溶岩台地で、古くは畜生ヶ原・畜生原（ちくしょうがわら）という。大日平の由来は、大日は近くにある大日岳に由来し、大日とは仏教の大日如来の略で、天照大神を祀った地を指し、そのため太陽を拝む絶好の地という意味がある。本地垂変説によれば天照大神は大日如来の化身である。第一群の「大日」は、信仰及び伝説・説話に関する用語である。第二群で語基の「平」の語義は、①②④⑭⑮などの意が考えられる。

また、同地は畜生ヶ原といい、畜生とは、六道の一つで、三悪趣の一つとされ、生前の悪行のむくい死後に落ちる畜生の世界・境遇のことで、ここに、仏教思想の畜生道がここに観念されたのである。羚羊が多く生息するので、これを畜生道の畜生と見立てたのであらうという<sup>17)</sup>。伝承で、「…屢々立山に登り…思ひ出でらる北方一原野あり畜生原と名く昔より此處に往きしもの遂に歸り来らずと云ふまた会て陸奥國板割坂の人藤原直亟と名つくる者茲に來りてゆくなり眠りしに身は何時しか牛と化し角さへ載きて馳せ廻りしと聞く畜生には三十四億の類ありて各残雪の心を含み小なるものは大なるものに呑まれ弱きものは強きものに喰はる晝夜朝暮暫くも安き時なし短きは一時永きは一劫乃至百千万劫を経るまで此苦を享くと云ふ藤原直亟の生まれながら畜生と化したる因の爲せる果とは云へ」<sup>18)</sup>、とこの地で、昼寝したところ畜生となったとを記すものがある。第一群の「畜生」とは、信仰及び伝説・説話に関する用語である。第二群の語基である「原」語義は、①②③⑥の意などが考えられる。

### ■一？雲ノ平（くものだいら）

標高二五〇〇～二七〇〇㍿の黒部川源流の谷ふところにあるテーブル状溶岩台地で、同地の最高点である標高二八二五㍿の祖父岳（じいだけ）を頂きに、同地はハイマツの中に安全岩・地塘・花畑が点在する景観で、まさに山雲のたむろする神秘境である。現在は、雲ノ平といい、奥ノ平ともいう。クモノダイラの「クモ」は、動物の「蜘蛛」とも表記された。蜘蛛もたくさんいたのであろうか。雲ノ平は、標高が二五〇〇～二七〇〇㍿という高いところに位置し、霊の上に台地があるように見えるので命名されたのではないか。また、奥ノ平というのは、黒部川の最上流にあるため「奥」と呼称したのか。あるいは、有峠より二日も要するので「奥ノ平」と命名されたのか。また、近くに祖母岳があることから祖母平とも呼称された。第一群に属する用語「雲」は、気象に関する用語。「奥」の場合は、形容語に関する用語。祖母の場合は、比喩に関する用語。蜘蛛の場合は、動物・植物・樹木に関する用語と考えられる。第二群で語基である「平」の語

義は、②④⑭⑮などの意が考えられる。

また、同地は原の付く、かつては大中原（おおなかはら）とも呼称された。江戸時代の加賀藩の奥山廻役絵図など越中古絵図には「大中原」と表記されている。同地の最高点である祖父岳は、古図に山中と記されている。大中原は中山と関連地名であろう。廣瀬氏は、大中原の由来について「越中古名で、赤岳を中岳、水晶岳を中岳劔、祖父岳を中山、同地（雲ノ平）を大中原と「中」を呼称したのは、この山塊が立山山脈と後立山山脈との中間に高くもりあがり、日本アルプスの最も奥深い山域を構成しているからであろう。」<sup>(19)</sup>という。大中原の第一群の「大中」については、「大」はこの地の大きさを示し、「中」はやはり廣瀬氏が、説くように立山と後立山の間意と考えられ、形容語に関する用語と思われる。第二群で語基である「原」の語義は、①⑥の意などが考えられる。

■一 2 追分平（おいわけだいら）

弥陀ヶ原の内で、かつては中津原とも呼ばれたという。追分とは、旧道で立山へ行くための一ノ谷方面の登山道と松尾峠を越えて立山温泉方面へ行く道の分岐点にあたる意をいい、交通・交易に関する用語である。平の語義は、④⑤⑧⑨⑮の意などが考えられる。原の付く「中津原」の意については、弥陀ヶ原の項目を参照。

■一 2 室堂平（むろどうだいら）

標高二四五〇<sup>㍉</sup>で、立山の真下であり、弥陀ヶ原の東端にある溶岩台地をいう。室堂平の第一群に属する用語「室堂」とは、かつて立山禪定者が、同地東側断崖にある玉殿岩屋や虚空蔵岩屋などに宿泊参籠した。この籠もり堂に由来するといわれ信仰及び伝説・説話に関する用語と考えられる。また、第二群である語基の「平」の語義は、①②④⑮などの意が考えられる。室堂は、明治の初期頃、仏教的色彩を消去するため、室堂の「堂」を「所」に改称し、室所と呼称した時期もあった<sup>(20)</sup>。

同地を、かつては「舊立山噴火口より溢流したる熔岩の、浄土山の西側を掠めて押出したる者は茲に二、四〇〇米の「室堂高原」を形成するに至つた。其末端は東方に於て「賽ノ河原」方面なる浄土川が迫り、北は地獄谷・畜生原に及んでゐる。廣漠たる一帯の高原…」<sup>(21)</sup>や「鏡石を過ぎ、丘のやうな起伏を三三越えて室堂の高原へ登りつく…」<sup>(22)</sup>というように、「室堂高原」とも呼称した。ここでの、「高原」は、「高い所にある原」の意で、「原」の語義は、①②⑥などの意が考えられる。

ちなみに、平の付く地名は、一般的な地名として全国的に分布している。東北地方では「平」をタイと呼ぶ場合が多い。青森・岩手両県には台地や山中の平坦地、段丘面、山間小盆地などに「～平（たい）」と呼ばれる土地が非常に多い。平の語義は、前記のよ

うに①～⑮の語義が考えられるように多くの意がある。しかも、その中の語義のいくつかは「平坦地」を意味している。松尾俊郎氏は、「平の地名について、平坦地を意味する地名は、多くの種類があり、地形地名として恐らく最も多彩な部類に属するもので、このことは人間生活における平坦地の意義を改めて考えさせるものがある。」<sup>(23)</sup>というように、平の付く地名の語義については、難解である。

また、平の語義には、台地の意がある。黒田祐一氏がいうように、「平は、台地を意味する地名で、全国的に分布する。表記は台でデーと発音するところもある。周辺より一段高い平坦地をまわりと区別してつけられた地名で、広大な台地全体をさすことはない。そうした全体に対してはハラやノといった地名がつけられていることが多いようである<sup>(24)</sup>。」と、平の地名は、「原」や「野」の地名とも関連があることを示唆している。

#### 4 「野」・「原」・「平」すべての地形語が付く同一地名（◆印で示す。）

##### ◆粟巣野（あわすの）

立山連峰域で、この分類に属するのは大山町の現行行政地名でもある粟巣野がある。現在は、粟巣野と呼称されているが、アワスの原（アワス原）、粟巣野平（平成に入り立蔵ヶ原全体を「粟巣野平」と命名したという。）<sup>(25)</sup>とも呼称される。アワスの原（アワス原）については、「猿飛山の麓に出でしに稍廣濶の地となる「アワス」の原と云う村松某の開墾地ありて…」と記すものがある<sup>(26)</sup>。

同地は、もと本宮村（現同町本宮）地内で、伝承でいう立蔵ヶ原の上方部の比較的なだらかな一地域である。第二次世界大戦後、この地に入植があり、本宮村から同地が提供され村落が形成された。始めは真川発電など建設関係の開発において、最初の拠点地を「粟巣（アワス）」といい、現在の「粟巣野」と呼称されるようになったのは、富山地方鉄道立山線の駅名に名乗ったのが始めてであろうといわれている。

第一群の「粟巣」の意であるが、「アワス」は、「袖あわす」に由来する、「着物の本体から出た袖の部分（現在の同地の鉄管踏の奥山台地）と粟巣（同地の最初の拠点地）の端を結ぶ意」<sup>(27)</sup>。また、この地に稗や粟を植えていたからという説がある。アワスはアハヒ（間・合）の略「あいだ、谷間」、「境目」の意と同意で、「A点とB点を結ぶ意」からの命名ではなかろうか。ここでの結ぶは、もとの領地（本宮）とこの地を結ぶ意か。本宮を中心とみれば、この地は奥の方と考えられる。第一群とする粟巣は、分類上、今回はその他の用語とする。第二群の「粟巣」の語基である「野」「原」「平」の語義であるが、「野」は、①②③④⑩などの意が考えられ、「原」の場合は、③④⑤⑥⑦などの意からか。「平」の場合の語義は ④⑤⑦⑧⑪⑫⑮などの意が考えられるが。

## 5 おわりに

今回は、紙面の関係上、立山連峰域における「野」「原」「平」の付く地名(表1)とそれら地名の「語構成」と「語義」の面から分類した表2の提示と、表2の中の(2)「野」・「原」両方にみられる同一地名、(3)「原」・「平」両方にみられる同一地名、(4)「野」・「原」・「平」すべての地形語が付く同一地名の推考を提示したのみで、予定されていた枚数がきてしまい、私自身、日頃記している研究ノートを少し整理した程度に終わってしまった。地名の分類すら十分に述べていない。

よって、本研究の立山連峰域<sup>(28)</sup>という「空間」での「野」「原」「平」の地形語が付く地名の「地名の認識(認知)」についての私見は、まったく述べていない。機会を新たに、述べてみたいと思う<sup>(29)</sup>。

## 註

- 1) 楠原佑介・溝手理太郎編『地名用語語源辞典』(東京堂出版 1982.4)の「野」は509～510頁。「原」は533頁。「平」は365・549～550頁を引用。「野」「原」「平」の語義については、色々と言が唱えられているが、同著は先学の研究を十分踏まえ、わかりやく各項目の語義を提示しているので、今回は、同書の語義説を紹介した。紙面の関係上、各項目の語義の提示と終始したが、機会を新たに各項目に対する私見を述べたいと思う。
- 2) 『古事類苑』地部三 (吉川弘文館 1977.1) 947頁
- 3) 柳田国男著『地名の研究』(角川書店 1976.7) 61頁
- 4) 『古事類苑』地部三 (吉川弘文館 1977.1) 921頁
- 5) 池田末則著『古代地名発掘』(新人物往来社 1978.7) 所収の「野」「原」考(136～143頁)。恩師である日本地名学研究所長の同氏と、同氏がこの論文を記すため奈良県内を踏査するのに、何回か同行し、多くの教示を受けた。現在も同氏からご指導ご鞭撻をいただいている。昭和50年代は、同氏をはじめとして「野」「原」の違いの研究が、地名・地理・国文・語源学の面から盛んに行なわれた頃である。
- 6) 『東アジアの古代文化 16号』(1978年)の吉田茂樹氏「古代地名からみた「野」と「原」の諸問題」(170～181頁)
- 7) 『島大國文』9 (1980.9) に、辻田昌三氏が「野」と「原」(32～44頁)を記し、さらに、同氏は同著『古代語の意味領域』(和泉書院 1989.6)で、「野」と「原」(1～42頁)について詳細にまとめている。
- 8) 『愛文』15 (1979)で、糸井通浩氏「「原」「野」語誌考・統紹」(39～45頁)
- 9) 廣瀬誠著『立山黒部奥山の歴史と伝承』(桂書房 1984.10)の「越中奥山の地名と

- 用字」弥陀ヶ原(397～399頁)に、「寛政十年(1798)佐藤月窓『立山紀行』に「中津原は弥陀ヶ原ともいひて、高根に近きわたりながら、蒼茫たる広き野原にて」あるやうに、別名中津原であった。神の座たる絶頂と下界との中間に位する原の意であらう。中といふ言葉は、単なる物理的中間ではなく、聖と俗の間を執り持つ重要な機能を有し、含蓄深い語である。」と記されている。
- 10) 廣瀬誠著『立山黒部奥山の歴史と伝承』(桂書房 1984.10)の「越中奥山の地名と用字」弥陀ヶ原(397～399頁)に、「寛政十年(1798)の佐藤月窓の『立山紀行』にも載つてゐる。さらに古く、天和三年(1683)の大淀三千風の「立山路往」には天津原といふ神道的な呼称で載つてゐる。」と記されている。
- 11) 解説・解題廣瀬誠『立山連峰誌料』(覆刻版)(新興出版社 1991.12)の「立山案内」23頁
- 12) 高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』(名著出版 1977.10)所収の佐伯幸長氏の「立山をめぐる伝承説話」や佐伯泰正著『立山のむかし』(1991)を参考にした。
- 13) 中島正文著『北アルプスの史的研究』(桂書房 1986.7)の23頁に「慶安元年七月三日一行は…黄金坂より材木坂、ぶな坂を経て弥陀ヶ原野に入り、…」と記してある。
- 14) 『ふるさと再発見II―地名の由来の考察―』(大山町自治振興会連合会 1997.3)278頁
- 15) 監修池田末則『日本山岳ルーツ大辞典』(竹書房 1996.2)637頁
- 16) 中島正文著『北アルプスの史的研究』(桂書房 1986.7)90～93頁
- 17) 廣瀬誠著『立山のいぶき』(シー・エー・ピー 1992.7)237頁
- 18) 解説・解題廣瀬誠『立山連峰誌料』(覆刻版)(新興出版社 1991.12)の「立山権現」22頁
- 19) 廣瀬誠著『立山黒部奥山の歴史と伝承』(桂書房 1984.10)の「越中奥山の地名と用字」鷲羽岳・水晶岳・赤牛岳(406～407頁)
- 20) 廣瀬誠編『越中立山古記録』第三卷(立山開発鉄道(株)1990.10)292頁
- 21) 解説・解題廣瀬誠『立山連峰誌料』(覆刻版)(新興出版社 1991.12)の「立山」28頁
- 22) 解説・解題廣瀬誠『立山連峰誌料』(覆刻版)(新興出版社 1991.12)の「立山群峯」17頁
- 23) 松尾俊郎著『地名の探求』(新人物往来社 1985.7)89頁
- 24) 『日本「歴史地名」総覧』(新人物往来社 1994.10)黒田祐一氏の「自然地名」の概論(66～68頁)

- 25) 『ふるさと再発見II—地名の由来の考察—』(大山町自治振興会連合会 1998.3)209頁
- 26) 解説・解題広瀬誠『立山連峰誌料』(覆刻版)(新興出版社 1991.12)の「立山権現」43頁
- 27) 註25) 前掲書
- 28) 立山連峰域について、同僚の吉井亮一氏より助言をいただいた。今回、表1・2に提示した立山連峰域での「野」「原」「平」の付く地名は、「大山町管内図」(5万分の1)・「立山町管内図 その1・2」(2.5万分の1)の地図をはじめ、『立山連峰誌料』・『北アルプスの史的研究』・『ふるさと再発見II—地名の由来の考察—』・『立山黒部奥山の歴史と伝承』・『富山県の地名』(平凡社)・『角川日本地名辞典 富山県』・『富山県大百科事典』(北日本新聞社)など地名が掲載されている資料から抽出した。
- 29) 本研究の中間発表を兼ね、平成12年3月19日(土)富山民俗の会例会(於富山県民会館509号室)で、富山の「野」と「原」の地名についてという題目で、研究発表をした。
- その時、本庄清志・奥野達夫・佐伯安一・漆間元三・廣瀬誠・伊藤曙覧の諸氏より色々のご教示を受けた。
- 今後、機会を新たに、本研究を詳細にまとめる時の糧としたい。
- また、本稿のタイトルの見出しを「越中立山の地名私考」としたのは、本年度より当館に勤務することとなり、今後、当館での在任中は、立山に関する地名について、毎年度、拙い成果を本紀要で示したいと思うからである。

表1 立山連峰域における「野」「原」「平」の付く地名一覧表

「野」の付く地名	「原」の付く地名	「平」の付く地名
	立蔵ヶ原	
	行者ヶ原	
	原・説法ヶ原・千坊ヶ原	
	小原	
	浄土原	
	宮林	
	五色ヶ原・五色原	
	多枝原	
	千寿ヶ原・千手ヶ原・千丈ヶ原 ・千樹原・千樹ヶ原	
	段ヶ原・壇ヶ原	
	小松原	
	湯原	
	賽の河原・賽ノ川原・賽川原・ 齋川原・再栄河原	
	カベツヶ原・カベキ原	
	阿曾原	
		しょういんのヒラ
		林ノ平
		白樺平
		別山平・三田平
		平
		美女平
		ブナ平・山毛櫨平
		天狗平・天狗平嶺
		鏡石平
		獅子ヶ鼻平
		弘法平
		内蔵助平
		池ノ平
		仙人平
		夢ノ平
		櫨平
		太郎兵衛平・太郎平
		赤木平
		タンボだいら
		七姫平
		法幢平
		上ノ小平・上ノ子平
		下ノ小平・下ノ子平
		薬師平
		薬師見平
		祖父平
		祖母平
弥陀ヶ原野	弥陀原・御田原・弥陀ヶ原 ・見だが原・中津原・天津原	
	高天原	岩苔平
	畜生ヶ原・畜生原	大日平
	大中原	雲ノ平・奥の平・奥ノ平・祖母 平・蜘蛛ノ平
	中津原	遣分平
	室堂高原	室堂平
粟菜野	アワスの原・アワス原	粟菜野平



(2) 「野」・「原」両方の地形語にみられる同一地名

ロ. 「原」(B)対「野」(A)の状況	表 示 法 一 1										表 示 法 一 2																	
	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	
▲-1 弥陀ヶ原		●										■																
弥陀ヶ原野		●										◆	◆		◆													

(3) 「原」・「平」両方の地形語にみられる同一地名

イ. 「原」(B)対「原」(A)の状況	表 示 法 一 1										表 示 法 一 2																	
	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	
■-1 高天原		●		●								■	■			■												
岩谷平	●						●					▲		▲														▲
ロ. 「平」(B)対「野」(A)の状況	表 示 法 一 1										表 示 法 一 2																	
ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯		
■-2 大日平		●									▲	▲		▲													▲	▲
音生ヶ原		●									■	■	■			■												
■-2 雲ノ平						●						▲		▲													▲	▲
奥ノ平				●								▲		▲													▲	▲
瀬母平						●						▲		▲													▲	▲
徳珠ノ原	●											▲		▲													▲	▲
大中原				●							■					■												
■-2 追分平									●					▲	▲			▲	▲									▲
中津原		●									■						■											
■-2 室堂平		●									▲	▲		▲														▲
室堂高原		●									■	■				■												

(4) 「野」・「原」・「平」すべての地形語が付く同一地名

「原」(A)・「原」(B)・「平」(C)対「野」(A)の状況	表 示 法 一 1										表 示 法 一 2																	
	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	
◆粟原野											●	◆	◆	◆	◆												◆	
アリスの原											●			■	■	■	■											
粟原野平														▲	▲			▲	▲							▲	▲	▲